

白居易「諭友詩」の本文

後藤昭雄

『白氏文集』巻一に「諭友詩」(52)という詩(五言古詩)

が収められている。この詩は天野山金剛寺(大阪府河内長野市)所蔵の『文集抄』に抄出されているが、その本文には他の諸本にはない独自の本文が含まれている。そこで、これについて考えてみたい。

「諭友詩」は次のような詩である。^[1]

昨夜霜一降 昨夜霜一たび降り
 殺君庭中槐 君が庭中の槐を殺らす
 乾葉不待黄 乾葉黄ばむを待たず
 索索飛下来 索索として飛び下り来たる
 憐れむ君が節物に感じ

晨起步前階

臨風踏葉立

半日顔色低

西望長安城

歌鍾十二街

何人不歡樂

君独心悠哉

白日頭上走

朱顏鏡中頽

平生青雲心

銷化成死灰

我今贈一言

晨^{あした}に起きて前階を歩み

風に臨み葉を踏みて立ち

半日顔色低^たるるを

西のかた長安城を望むに

歌鍾^{かしょう}十二街

何人か歡樂せざらん

君独り心悠なるかな

白日頭上に走り

朱顏鏡中に頽^{くず}る

平生青雲の心

銷化^{しょうか}して死灰と成る

我今一言を贈る

15

10

5 憐れむ君が節物に感じ

勝飲酒千杯 飲酒千杯に勝らん

其言雖甚鄙 其の言甚だ鄙しといへども

20 可破悒悒懷 悒悒たる懷ひを破るべし

朱門有勲貴 朱門に勲貴有り

陋巷有顏回 陋巷に顏回有り

窮通各有命 窮通各おの命有り

不繫才不才 才不才に繫からず

25 推此自豁豁 此れを推せば自づから豁豁たらん

不必待安排 必ずしも安排を待たじ

注1著の「解題」に、本詩はこの前に置かれた「夏旱詩」

に続いて元和九年（八一四）の作である可能性が高いという。

とすれば、白居易は母の喪が明けて、長安での官僚生活に戻

ろうとしていた。

詩は三段に分かれる。第一段は第8句までである。晩秋の

一夜の霜は友の庭の槐を枯らしてしまった。黄ばむ間もなく

葉はサワサワと散っていく。その中に俯いたまま半日立ち尽

くす友がいる。第二段は第9句から16句まで。西の方長安に

は歡樂に耽る人々の群。君のみは憂いの中にある。時の過ぎ

行く中に若々しかった顔は失われ、かつての青雲の志も、も

はや冷え切った灰のようになってしまった。第13句以下の4

句は、詩人が友の心中を推し量って代弁したものが。第12句

の「悠哉」の「悠」は憂に同じ。第17句以下の第三段は友へ

の勵ましである。第20句の「悒悒」は憂憂に同じ。第21・22

句の対句から23・24句「身の困窮と榮達は運命に依るもの、

自己の才不才とは無関係なのだ」が導かれる。そして結びで

ある。こう考えれば自づから心は晴れやかになろう。必ずし

も世の移ろいを気にかけることはない。結句の「安排」は世

の推移に安らかに従うこと。

この詩が金剛寺藏『文集抄』に抄出されている。本書は

『白氏文集』から詩文を抄出したもので、他にも同様の書が

あり、選抄本と呼ばれている。粘葉装一冊（四七丁）である

が、内題に「上上」とあることから、元來はかなり大部の書

であったと考えられる。次の奥書がある。

以證本校合了

建治元年五月九日於小坂亭書之

桑門願海在判

建治二年九月日 於白川之遍寫了

これによって、本書は建治元年（一二七五）願海なる僧が

小坂において書写した本に拠って、翌二年、白川で書写した

本であることが知られる。史料に尋ねると、願海は醍醐寺の

法系に属し、鎌倉の極楽寺に止住した僧侶であり、小坂は現在の神奈川県逗子市に属する地であることが明らかになる。

白川は京の白川であろう。

本書には賦二首（卷二一より）、詩四九首（卷一一九首、卷二一一首、卷五一一〇首、卷六一九首）が採録されている。⁽²⁾

我が国には周知のように『白氏文集』の古態を残す古写本が数多く遺存しているが、その中にも卷一は残っていない。

卷一の詩を伝えるものは、前述の選抄本である。それには国立国会図書館蔵『文集抄』、『白氏文集要文抄』（東大寺図書館蔵）、『管見抄』（国立国会図書館内閣文庫及び京都智積院蔵）の三書があり、この『文集抄』と同じように『白氏文集』から詩文を抜き出して採録している。しかしこの三書も「論友詩」は抄出していない。要するに、金剛寺本『文集抄』に引く「論友詩」は古写本における唯一の本文なのである。

それは次のようなものである。影印であげる。⁽⁵⁾

論友詩一

昨夜霜一降 紋君庭中杌 乾茶不待煎
 糸（下） 佛（下） 來 憐君感節物 晨起坐前階
 臨風躡（下） 素立 半日顏不開 西望長安城
 歌鐘十二街 何人不歡樂 君獨心悠哉
 白日頭上走 朱顏鏡中顏 平生青雲心

銷化滅（下） 死天 我今贈一言 勝飲酒千盃
 其言雅喜跡 可破（下） 絕（下） 懷 朱明有堂賢
 陋卷有顏間 窮道各劇令 不繫才不才
 惟此自路（下） 不（下） 心待不（下） 排

この本文を前掲の新釈漢文大系本と比較してみると、傍線を付した五箇所異なるがある。一つずつ見ていこう（以下

『文集抄』は本書と称する)。

まず第7句の「蹋」―「踏」である。蹋は本書の独自異文であるが、踏の本字であるから、同一本文となる。

第10句の「鐘」―「鍾」は別字であるが、同義(かね)であるから、問題にはならない。

第23句の「問」―「有」。別字である。ただし、刊本にそれぞれの本文があり、中国の『白氏文集』注釈書で校合に用いられている。たとえば朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)は「問命」に作るが、校注に次のようにいう。「問」、馬本、汪本俱作有。拋宋本、那波本、盧校改。すなわち、この書の底本である馬元調本及び汪立名本は「有命」であるが、宋紹興刊本以下の三本に拋つて「問命」に改めた。このようにこの両字はすでに既知のものであるから、ここでは問題としない。検討したいのは本書の独自本文二例である。

第8句、本書の「不開」に対して大系本は「色低」に作るが、ここは既知の諸本の間でも異同があった。これから見ておこう。中国における最も新しい注釈書、謝思煒『白居易集校注』(中華書局、二〇〇六年)は宋紹興刊本を底本として「色低」であるが、その校注に、那波本、馬元調本、『唐音統

籤』、汪立名本は「低」を「哀」に作ると記している。刊本の間で「低」と「哀」の違いがあった。すなわち「顔色低る」か「顔色哀し」ということになる。これに対して本書の本文は「顔不開(顔開けず)」である。刊本の「顔色+低(哀)」の「顔色」という熟語が消えることになる。なお、「開」は「槐・頰・灰」などと同じ上平声の灰韻。

大系本の語釈には「顔色低」という措辞は白居易の他の詩にも例があることを指摘している。『白氏文集』巻二「秦中吟」の四「友を傷む」(78)の

陋巷飢寒士 陋巷飢寒の士

出門甚栖栖 門を出でて甚だ栖栖たり

雖云志氣在 志氣在りと云ふといへども

豈免顔色低 あに顔色低るるを免れんや

また巻三「新樂府」の「馴犀」(140)の

馴犀死 蛮兒啼 馴犀死して 蛮兒啼く

向闕再拝顔色低 闕に向かひて再拝し顔色低る

である。一方、「顔不開」は白居易詩にはないが、他の詩人は用いている。

梁の呉均「行路難」二首(『玉台新詠』巻九)のその一に、
班姬失寵顔不開 班姬寵を失ひて顔開けず

奉帚供養長信台 帚ほうしゅうを奉じて供養す長信台

とある。「班姬」は班婕妤である。漢の成帝に仕え寵愛を受けたが、のち趙飛燕姉妹に寵を奪われ、帝の母後の住む長信宮で仕えた。また、白居易の詩友である元稹の「琵琶歌」

(『元氏長慶集』卷二六)に、

去年御史留東台 去年御史として東台に留まり

公私蹙促顔不開 公私蹙しゆくそく促して顔開けず

とある。周相録『元稹集校注』(上海古籍出版社、二〇一一年)によれば、これは元和五年(八一〇)の作で、時に詩人は左遷されて江陵(湖北省)にあった。「東台」は東都洛陽の御史台、「蹙促」はちぢこまることをいう。かくて「顔不開」も考えられる本文である。

この例は、句の意味は「顔色低る」は、顔をうつむけたままである、「顔開かず」は、顔を憂いに沈んでいる、とほぼ同じである。写本の本文に拠ることの意義はさしたるものではない。しかし、次の例は大きく異なってくる。

第21句、「董賢」——「勳貴」の異同である。ここも既知の

諸本間で異同があった。前述の『白居易集校注』の本文は「勳賢」であるが、校注に馬元調本、『唐音統籤』、汪立名本は「勳貴」に作ることを注している。一方『白居易集箋校』

は、本文は「勳貴」であるが、校注に那波本は「勳賢」に作るという。すなわち「勳賢」——「勳貴」の異同であるが、これは共に普通名詞(功績ある賢人、また功績ある貴人)である。

これに対して本書の「董賢」は固有名詞、人名である。その名は『漢書』に現れる。卷九三、佞幸伝に伝が立てられている。佞幸伝に入るといことがすでに彼がいかなる人物であるかを推測させる。董賢は生得の美貌の持ち主で、それが哀帝の目に止まり寵愛を受けることになる。彼は常に帝と起臥を共にしていたが、一緒に昼寝をした時、片寄って帝の衣裳の袖を体の下に敷いてしまった。先に目が覚めた帝は起き上がるうとして袖が抜けないのに気づいたが、彼を起こしてしまふのを憚って我が袖を断ち切った。よく知られたエピソードである。寵愛は一族へも及んだ。そのうち、妻の父についての次の記述は本詩の理解に関わるものである。

又以賢妻父為將作大匠、弟為執金吾。詔將作大匠為賢起

大第北闕下、重殿洞門、土木之功、窮極技巧、柱檻衣以綈錦。(また賢の妻の父を以て將作大匠と為し、弟を執

金吾と為す。詔して將作大匠に賢の為に大第を北闕の下に起こさしめ、重殿洞門、土木の功、技巧を窮極め、柱

檻衣おおいふに緋錦ていきんを以てす。

「大第」は大邸宅、「緋」は厚地の絹。

この「董賢」の本文に依ればどうなるか。「朱門に董賢有り」は次の「陋巷に顔回有り」と意味の上で対句をなしている。後句は周知の『論語』雍也の「賢なるかな回や、一簞なだの食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂へに堪へず、回や其の樂しみを改めず。賢なるかな回や」を踏まえる。孔子は弟子の顔回の生き方をこのように褒めた。「董賢」の本文は同じ人名として「顔回」とよく対偶をなす。「朱門」は朱塗りの大きな門。権貴富裕の象徴である。前引の董賢伝にいう「大第」に対応する。すなわち「董賢」の本文は「朱門」とぴたりと照応するのである。

天野山金剛寺蔵『文集抄』は白居易の「論友詩」（『白氏文集』巻一）を遺存する唯一の古写本である。いわゆる旧鈔本の本文は本書にのみ残されている。そこで、これを現行のテキストと対校してみると、二箇所独自異文があるが、とりわけ第21句「朱門に董賢有り」の「董賢」の本文は注目される。現行のテキストの本文は「勳貴」あるいは「勳賢」であるが、これら一般の熟語に対して「董賢」は人名である。そ

うして、このことよって、次の句との対偶はよりの確なものとなる。現行本の「朱門有勳貴（勳賢）」——「陋巷有顔回」によっても、この一聯が対句であることは明白である。

作者がここを対句とすることを意図したのであれば、「董賢」——「顔回」という人名を対語に置いた完整の対句こそが本来の姿であつたのではないだろうか。

注

(1) 最も新しい注釈として新釈漢文大系、岡村繁著『白氏文集』一（明治書院、二〇一七年）に拠る。当該詩は静永健執筆。

(2) 『文集抄』については、拙稿「金剛寺蔵『文集抄』」（『本朝漢詩文資料論』勉誠出版、二〇一二年）参照。

(3) 注1者の岡村繁『白氏文集』解題の「五、『白氏文集』の旧鈔本」にその一覧がある。

(4) 本書は金剛寺本と同名であるが異書である。太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』中（勉誠社、一九九七年）第三章一(3)「国立国会図書館蔵『文集抄』——附『文集抄』翻印」に詳しい。

(5) 『天野山金剛寺善本叢刊』第一巻「漢学」（勉誠出版、二〇一七年）に所収。

（こ）こう・あきお 成城大学元教授